

メッセージアウトライン 創世記15:1～21「義と認められたアブラム」

[1]「これらの出来事の後、主のことばが幻のうちにアブラムに臨んだ。『アブラムよ。恐れるな。わたしはあなたの盾である。あなたへの報いは非常に大きい。』」

これはアブラムが東方の王たち、ケドルラオメル連合軍を打ち破り、甥のロトとその全財産を取り戻した後のことである。彼はダマスコの北ホバまでの追跡と激しい戦いの後の落ち着かない状況であったであろう。「幻のうちに」…ある種の恍惚状態であったと思われる。主のことばがアブラムに臨んだ。「アブラムよ。恐れるな」…東方の王たちの報復を恐れていたか。戦いの緊張からの解放による疲れからの不安もあったであろう。「わたしはあなたの盾である」…たとえ敵が攻撃してきても主なる神が盾となってアブラムを守ってくださる。これほど力強いことはない。「あなたへの報いは非常に大きい」…14:21~24でアブラムはソドムの王からの報いを拒んだ。このことに対応するように主は非常に大きな報いを与えると言われた。罪と悪徳にまみれたこの世の王からの財産を拒んだ彼を主は放っておかれず、豊かな報いをもって臨まれる。これこそ主なる神の方法なのである。

[2-4]「アブラムは言った。『神。主よ。あなたは私に何を下さるのですか。私は子がないうままで死のうとしています。私の家の相続人は、ダマスコのエリエゼルなのでしょうか。』さらにアブラムは言った。『ご覧ください。あなたが子孫を私に下さらなかったため、私の家のしもべが私の跡取りになるでしょう』すると見よ。主のことばが彼に臨んだ。『その者があなたの後を継いではならない。ただ、あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの後を継がなければならない。』」

当時は主人に相続人となる実子がいない場合、親族あるいはしもべ（奴隷）の中から相続のための子を選ぶということが法的に認められていた。ダマスコのエリエゼルとはダマスコの町の出身であったか、あるいはその親がダマスコ出身であったのかもしれない。3節で彼は「あなたが子孫を私に下さらないので…」と大いに主に不満を訴えている。12:7の主の約束はどうなるのかとの思いもあったであろう。しかし主は「あなた自身から生まれ出て来る者が、あなたの後を継がなければならない」とアブラムの疑問に明確に答えてくださった。主に何事でも訴えたとき、主が答えてくださる。これが聖書の教える生ける真の神なのである。

[5]「そして主は、彼を外に連れ出して言われた。『さあ、天を見上げなさい。星を数えられるなら数えなさい。』さらに言われた。『あなたの子孫は、このようになる。』」

これはアブラムに与えられている祝福(12:1~3,7)の確認であり、さらに詳しい具体的な内容の展開である。主は祝福の約束を漠然としたままで放っておかれたのではなく、アブラムに理解できる形で示されたのである。

[6]「アブラムは主を信じた。それで、それが彼の義と認められた」

アブラムは語られた神のことばを信じた。彼はそのみことばを無条件に信頼したのである。何と単純な人とは言うかもしれない。しかし、彼は自分をメソポタミアからここまで導き、エジプトでの危険から脱出させてくださり、東方の王たちの軍から甥のロトとその財産をも取り戻させてくださった主なる神のこの約束、祝福のことばを心から信じ受け入れることができたのである。鉄でできた船が水に浮かび、同様に金属でできた重い飛行機が空を飛ぶということを疑い、信じられない人はいつまでたってもそれに乗って目的地に着くことはできないだろう。しかし、アブラムは約束してくださった主なる神を信じたのである。そして主はそれを彼の義と認められた。後に新約聖書では、人は律法を行うことによってではなく、信仰によって救われるということを教えるためにこのアブラムのことを引用している。→ローマ4:1~5 これは信仰義認という大切な教理として知られている。

しかし、覚えておかなければならないことは、これは信仰的、道徳的に完全な人になったということではなく、神の側で人間の神のみことばに対する無条件の信頼に対して、それをよしとして受け入れ、権威をもって承認してくださったということである。それとは別に信仰的成長、聖化ということとは、その生涯において一生続いていくことである。→I コリント1:8,ピリピ1:6, I テサロニケ5:23~24

[7]「主は彼に言われた。『わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを導き出した主である』」

主なる神はアブラムがカルデアのウルに住んでいた時代から今日まで導いているのは他ならぬ私、主だということを改めてここで明らかにしておられる。彼を導き祝福を与えてくださるお方は人間が頭で考えだした偶像の神々ではなく、天地万物を造られ、これを支配しておられる主なる真の神なのである。その主がこの地をあなたに与えると約束してくださった。このことは後にアブラムの子孫がこの地に住むことの正当性を保証するものであった。

[8-12] アブラムは「私がそれを所有することが、何によってわかるでしょうか」と主に問うたが、主はそれに対してひとつの象徴的儀式を行われ、彼と契約を結ばれる。それはそれぞれ三歳の雌牛と雌やぎと雄羊と山鳩と鳩のひなを用意して、それらを真っ二つに切り裂き、その半分を互いに向い合せにすることによって行われた。三歳という動物の年齢は十分に成長したことを示すものであろう。「鳥は切り裂かなかった」とあるがレビ1:17の鳥のささげ物の場面ではその翼を引き裂くように指示されている。アブラムの時も同様であったのだろう。そしてなぜこんなことをするのかと言うと、この二つに裂かれ向い合せにされた動物の間を契約を結ぶ者同士が通って、もしも契約を破った場合はこれらの裂かれた物と同じ状態になってもかまわないということを意味したのである。当時はそのようにして契約を成立させたのである。そして主はこの人間の間での契約の形式を用いてアブラムとの契約に入られたのである。「猛禽」は秃鷹や鷲などの鳥であるが、これらが肉を求めて

集まって来るのは当然で、契約の重要性を知っているアブラムはこれを追い払った。契約関係は邪魔を排して全うされなければならない。「日が沈みかけたころ」…5節の次の日の夕方。「深い眠り」…動物の犠牲を備えるための日中の労働から来る疲れなどがあつたであろう。「大いなる暗闇の恐怖」…アブラムの子孫が通らねばならない暗い苦難の時代の予告的経験か。

[13-16] この箇所はアブラムの子孫であるイスラエル民族のエジプト滞在期間とその苦難と解放に関する言及である。「自分たちのものでない地」と主はあえてエジプトという名を使われない。預言とはこのような抽象的な表現が多い。「四百年」とは概数で出エジプト記12:40によれば四百三十年。そして「その後、彼らは多くの財産とともに、そこから出て来る」(14)これは出エジプトの出来事である。しかし、アブラムは「…幸せな晩年を過ごして葬られる」(15)「四代目の者たちがここに帰ってくる」(16)。四百年で四代とは少なすぎるように思えるが、これはアブラムから数えるのではなく、エジプトへ行ったその時から数えるのであり、出エジプト記6:16~20のレビの系図を見るとエジプトへ行ったレビ(137年)、その子がケハテ(133年)、その子がアムラム(137年)、その子がモーセ(120年[申命記34:7])となっており、レビから数えるとまさに四代目のモーセが出エジプトの指導者となってカナンの地へ戻って来るのである。「アモリ人」はカナンの先住民族全体(ケニ人、ケナズ人、カデモニ人、ヒッタイト人、ペリジ人、レファイム人、アモリ人、カナン人、ギルガシ人、エブス人[19-21])の代表として名があげられている。

「咎が、その時までには満ちることがないからだ」つまりイスラエルはカナンの先住民族に対する神のさばきの器として用いられるのである。→ヨシュア記参照

[17-21]「煙のたつかまどと、燃えているたいまつが、切り裂かれた物の間を通り過ぎた」これは明らかに神の現れのしるしであり、火は神の臨在を現わすと思われる。暗闇の中でのこの出来事はアブラムに強い印象を与えたことであろう。これは人間であるアブラムと主なる神が相互に条件を出し合つての契約ではない。全知全能で万物の創造者、支配者である神からアブラムに対する一方的な恵みの契約であつた。そして人間であるアブラムがその契約にあずかるのである。このような目に見えるしるしが与えられたのは、これからの試練に対する支えとしてこの契約がはっきりとアブラムの心に刻み込まれるためと思われる。アブラムは七十五歳でメソポタミアのハランから出てきたのであつたが(12:4)、老年であるとはいえ、彼の信仰の歩みはまだ始まつたばかりなのである。

「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える。エジプトの川から、あの大河ユーフラテス川まで」(18)「エジプトの川」これはエジプトのナイル川のことではなく、死海の南西約100kmから地中海に流れるエジプト川のこと。カナンの地の先住民族に代わつて、やがてアブラムの子孫がこの地に住むようになるとの約束である。

アブラムは主を信じ、主はそれを彼の義と認められた。何の働きも、行いもない

者がただ主を信じる信仰によって義と認められたのである。そして主は裂かれた動物の間を通るといふ目に見えるしるしをもって、アブラムと契約を結ばれた。彼が信仰を持って主を信じ、豊かな祝福をいただいたように、アブラムの子孫として来られた救い主イエス・キリストを自分の救い主と信じる者は豊かな恵みをいただくことができる。主は動物のような代用品ではなく、ご自身のひとり子であるイエス・キリストを私たち人間の罪の贖いのために十字架につけ、救いの道を開いてくださった。このイエスの十字架は私の罪のためであったと信じ受け入れる者は誰でも、アブラムと同様、神に義と認められるのである。→ローマ3:23~26、4:1~5